九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

教示行為の基盤となる他者の知識・注意状態理解の初期発達

孟, 憲巍

https://doi.org/10.15017/1931676

出版情報：九州大学, 2017, 博士（心理学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式３）

氏　　名　：　孟憲巍

論 文 名　：　教示行為の基盤となる他者の知識・注意状態理解の初期発達

区　　分　：　甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文では，教示行為（teaching）に関する研究動向をレビューした上で，ヒト社会に見られる高度かつ複雑な累積的文化に不可欠な「ヒト特有の」教示行為の基盤となる社会認知能力およびそれに基づいたコミュニケーション行動の初期発達過程を実証的に検討した。

第１章では，動物界における教示行為の概念を「意図性」,「文化」,「機能」という三つの視点から整理し，ヒト特有の教示行為の可能性を提示した。具体的には，ヒトにおける教示行為の特徴は，自他の知識・注意状態の不一致を検出した上で，コミュニケーション（言語的なものに限らない）を通して適切に補完するプロセスとして捉えることが可能である点にある。このプロセスの発達的起源の解明を目指す本研究の学術的な位置づけを示した後に,「ヒト特有の」教示行為の必要能力とその初期発達を統合的に整理した上で，生後１歳半頃から教示行為が見られる可能性およびそれを検証するために解決すべき問題を提示した。この問題とは具体的には（１）注意関係の一致性に対する理解の初期発達過程（第２章で検討）と（２）他者の知識・注意状態を踏まえた自発的なコミュニケーション行動（第３章で検討）とが明らかになっていないことであった。

第２章では，これまでの知見を踏まえた上で，実験的な検討を通して注意関係の一致性に対する理解の初期発達過程を明らかにした。実験では，他者同士の間における注意の状態の一致性を操作した（一致，不一致）動画を９ヶ月，１歳と１歳半の乳児に見せた。この実験状況のセッティングでは，乳児は第三者として他者間のインタラクションを観察する立場にいる。この状況にいる乳児がもし他者間の注意状態の一致性によって特定の反応を示したならば，乳児がそれらの一致性を検出していること，つまり，理解していることがいえると考えられる。実験では乳児は２人のモデルのうちの１人（行為者）が目の前にある２つのオブジェクト中１つ（ターゲット）に視線を向けることを観察した。モデルらの注意関係を操作した。Face-to-face 条件では，モデルらは互いに向き合ってから行為者がオブジェクトに視線を向けた。Back-to-back 条件では，モデルが互いに背を向けてから行為者がオブジェクトに視線を向けた。画面内の人物やオブジェクトに対する乳児の注視行動を分析した結果，９ヶ月児と１歳児はどちらの条件においても行為者の視線を追ってターゲットに視線を向けた。しかし，１歳半児は違う注視行動を示した。１歳半児は face-to-face 条件では行為者の注視行動に対して視線追従（行為者の視線を追ってターゲットを見る注視行動）を示したが，back-to-back 条件では示さなかった。また，９ヶ月児と１歳児と比べて１歳半児はより多くの試行でパートナーに対する速やかな視線シフトを示した。それは，行為者の注視行動に対するパートナーの反応への期待を反映していると考えられる。以上の実験結果から，他者間の注意状態に対する感受性が生後２年目で発達を見せることが明らかになった。このことは,「ヒト特有の」教示行為の基盤となる「注意状態の一致性に対する理解」が生後２年目で発達を見せることを示唆する。

第３章では，前章で示唆された「１歳半児は注意状態の一致性を理解し，他者の注意状態に不一

致が生じた場合では『イベントに気づいていない』人に対して自発的に注意を向ける」という知見に基づき，この月齢の乳児は他者の知識・注意の状態を踏まえて他者に対する自発的なコミュニケーションをおこなうかを検討した。実験では，乳児がまず実験者・母親と別々に違うオブジェクトを用いて同時間で遊んだ（Shared experience phase）。その後，乳児と実験者とテーブル越しで対面すると，実験者の背後の２つの窓のそれぞれからオブジェクトが出現するが，実験者がそれに気づかない状態であった（Pointing phase）。Shared experience phase では乳児が両方のオブジェクトを経験している（遊んでいる）が，乳児にとって実験者が片方のオブジェクトしか経験していない。つまり，乳児にとっては実験者が片方のオブジェクトしか「知らない」（乳児がこのように思うのかもしれない）。Pointing phase では，オブジェクトが出現する場面における乳児と実験者との共同注意が成立しない状況（注意状態に不一致がある状況）において，つまり，乳児にはオブジェクトが見えているが実験者には見えていない状況において，乳児はオブジェクトを自発的に指さすか，さらに乳児はオブジェクトを選択的に指さすかを調べた。その結果，乳児は shared experience phase において実験者と一緒に遊んでいなかったオブジェクトを一緒に遊んだオブジェクトより優先的に（最初に）指さした。一方，統制条件であるどちらのオブジェクトも経験していない新たな実験者と対面する状況では，指さしの偏りが見られなかった。このことは，乳児は目の前にいる人の知識・注意の状態によって指さしの方略を変更していることを示している。これらの結果を踏まえ，１歳半児が他者の知識・注意の状態を踏まえた上で自発的なコミュニケーション行動をおこなっていることを明らかにした。考察では，対象物に向けられる指さしの動機の可能性および本実験の文脈を総合的に検討し，本実験で見られた乳児の選択的な指さしが他者に情報提供をする動機を反映している可能性を提示した。

第４章では，本論文の二つの実験的研究から，「生後 1 歳半頃から，乳児は注意状態の不一致に対する理解を示し，他者の知識・注意の状態を踏まえた上で自発的なコミュニケーション行動をおこなっている」ことが示唆されることを指摘した。これは，乳児が言語習得以前からすでに効果的な学習者であるだけでなく，コミュニケーションにおける柔軟な参加者でもあることを提示するものである。最後に，本研究で示唆された発達初期における情報提供の可能性を検証する方向性として，乳幼児期における援助行動の動機および情報伝達方略の発達的変化を調べる具体的な研究方法を提示した。

総じて，本論文は，教示行為におけるヒト特異性を理論的に考察した上で，その基盤となる他者の注意状態の不一致に対する理解，そして他者の知識・注意の状態を踏まえた自発的なコミュニケーション行動の初期発達に関する実証的な知見を提供した。従って本論文はヒト独自の情報伝達を可能にする教示行為の発達的起源の解明に貢献するものであると考えられる。